

石材が運ばれた「石の道」

## 石山通

明治時代に馬車鉄道が敷設され、石山から札幌へ石材を運ぶ主要道路として利用された石山通を紹介します。

石山通は、古くは「本願寺道路」と呼ばれ、明治三年（一八七〇年）に東本願寺の僧たちが、現在の山鼻から中の沢までの区間を開削した道路が始まりです。当時は、幅が約一呎、長さが約四キロしかありませんでした。

この道路が現在の石山通と同じ経路になったのは、八年（一八七五年）のことです。屯田兵が山鼻に入植すると同時に、屯田兵の中隊本部と札幌本府を結ぶ幹線道路として整備されました。

石山通はその名の通り、石と大変深くかかわってきました。五年（一八七二年）に、発足別（現在の川沿町、硬石山）で硬石の採石が、八年（一八七五年）には、穴の沢（現在の石山地区、軟石山）で軟石の採石が始まりました。



馬車鉄道

そこで、これらの石材を札幌本府での建築用材として使用するため、北海道開拓使の黒田清隆くろだきよたか長官が特命により、山鼻村から真駒内を通って、石山までの直線馬車道を開いたのです。石材を積んだ馬車がこの道路を通ったため、馬のいななきや馬車の音が響き渡り、活気あふれる通りであったといわれています。このころから「石山」の地名が使われ始めま

した。その後、石材運搬のために、民業による馬車鉄道が札幌で最初に敷かれたことも相まってその名が定着し、石山通と呼ばれるようになりました。

この馬車鉄道も大正七年（一九一八年）には電車への切り換えと、定山溪鉄道の開通により完全に姿を消したため、石山通はすっかり影が薄くなりました。しかし、戦後の高度成長期を迎えると、自動車



軟石の切り出し風景

の普及によって、市内を南北に走る石山通の交通量は飛躍的に増加していきました。

かつて馬車や馬車鉄道が行き来した石山通は、夏は支笏湖・洞爺湖方面への行楽客に、また、冬は定山溪・ニセコ方面へのスキー客に大いに利用され、市内交通の大動脈となっています。



石山通（平成11年）

（平成十一年八月号・第五十九回）